

出張報告

報告日 2025年2月7日

会 派 名	柏盛クラブ
報告者氏名	三宮 直人 重野正毅
種 別	☐ 調査研究 (☒ 行政視察) ☐ 研修会 ☐ 要請・陳情 ☐ 各種会議
用 務	津山市視察
日 時	令和7年1月29日(水) 15時00分～16時30分
場 所 (会場)	津山市役所
調査項目等	津山市「まちじゅう博物館構想」の調査
概 要	<津山市概要：令和6年1月1日現在> ・人口96,314人(県内3位)、面積506.33km²(県内5位) ・津山藩の城下町で歴史的な街並みが残る。鉄道の要衝だった。 ・主たる産業は物づくり、製造品出荷額等は2000億円程度。 ・令和3年の観光客数は200万人前後。 1.「まちじゅう博物館構想」の概要説明 ①構想の出発点 ・津山市は魅力があるが活かしていない、魅力をアピールできていない、コンテンツが足りない、担い手になる人がいない。 ・津山全体を屋根のない博物館としてアピールすれば津山に人が来て、市民の街への誇りと愛着を強くできるのではないか。 ②まちじゅう博物館構想(屋根のない博物館)とは新たに博物館をハード整備するのではなく、歴史的建造物や自然資源で市内を8つにゾーニングしそれぞれを「館(やかた)」と称し周遊ルートを作り訪れてもらう構想。 ③基本理念は「津山らしさ」の創造と地域活力の向上。津山らしさとは「時代に挑戦する気運」。意識づくり、人づくり、土台づくり、施策づくりを基本に取組む。 ④構想の検討にあたっては、目指すビジョンを描く→その実現のために課題を

整理する→大学の有識者、新聞社、観光協会、商工会議所などと連携し課題解決する→目指す姿を実現するバックキャスト方式で進める。

⑤人づくりでは市民懇談会でアイデア出し、つやま郷土学の実施や津山まちじゅう博物館で人材発掘、土台作りでは主要施設のピクトグラム作成、施策づくりでは中心市街地の空き家の見える化、まちかどマルシェでスイーツ開発、高等教育機関（早稲田大）と連携した魅力発掘などを行っている。

⑥行政主導ではなく極力民間（市民）主導で取り組みを推進する。

2. 質疑

Q1 この構想以前に得た経験や知見を構想にどう活かしているか。

→観光、産業振興、都市計画などで得た知見等をまちじゅう博物館で繋ぎ合わせていく。経済効果の評価は難しい。

Q2 まちじゅう博物館を採用した理由は。

→地域のことは地域全体でやっていく ecomusee（エコミュゼ）という発想があり早稲田大学の先生から感銘を受けた。

Q3 市外の大学生の意見を聴取している狙いは。

→津山らしさを市外の方がどうみているのか率直な意見を聞きたかったこと、関係人口を創出したかったこと。現在の大学は地域連携に力を入れている。

Q4 有識者としてどのような専門性をもった方に参加いただいたのか。

→大学からはまちづくり、古い町並み再生、都市計画、観光行政の専門家に参加いただいている。

Q5 職員の中にグランドデザインができる方はいるのか。

→いないが、地域おこし協力隊で宅建資格のある方と地元で商品開発の経験がある方の2名をマネージャーとして採用した。他に、地域DMOには地域おこし企業人やJR、JTBで経験のある方がいる。つなぎ役は必要。

Q6 周遊コースはどんな観点で繋いだのか。

→あくまで1例。将来はAIを使い個人の物語に合わせていきたい。

Q7 新たな観光資源を準備したのか。

→無電柱化や駐車場、城泊（お城で宿泊）の整備、交通安全対策を徐々に進めている。

Q8 構想に対する市民の反応は、市民は楽しんでいるか。

→事業開始して1年、市民への浸透は課題。自分主体で取組みに参加し体験した方の達成感が高い。小学生では自分達で考えた商品を自分達で販売する取組みを行っている。



所 感 等

【三宮直人】

津山市においても地方都市が直面する人口減少に対する危機感から「まちじゅう博物館」の取組みを開始している。津山市の魅力の本取組で再認識しアピールし、市民特に若い層のふるさと津山への誇りと愛着を育み継続的な定住を図ろうとしている。その意味では柏崎市と同じ戦略と思う。

特徴的なのは、共通の軸として「地域のことは地域全体でやっていく ecomusee (エコミュゼ)」を基本的な思想としていること、博物館と言っても新しい建物を造るのではなく城下町でもあり既存の資源を「館」と見立て線や面として繋いでいること、構想の検討にあたっては大学などから多様な分野の専門家や大学生を招致していること、実行にあたっては空き家店舗活用のために宅建資格がある方、商品開発や観光で実績のある方をメンバーに加えていることなどがあげられる。柏崎市においても観光ビジョン策定後に観光に関する様々な活動を行っているが推進の検討段階、実行段階の体制は十分なのか疑問が残る。

柏崎市と津山市では歴史上で大きな違いがある。柏崎市は商人の街、津山市は城下町であり同じことはできない。津山市が「まちじゅう博物館」としているところを柏崎市では「まちじゅう美術館」として構想を練ってはどうか。木村茶道美術館をはじめ市内には歴史的文化的価値の高い美術品が多く現存しているのではないか。「つるし雛かざり」や「柏崎の花」なども美術品と言えよう。障がい者による「柏崎まちごと美術館」も好評と聞く。

津山市の「まちじゅう博物館」の取組みをヒントに「柏崎市まちじゅう博物館」を想像してみたい。

【重野正毅】

令和5年3月に策定したまちじゅう博物館構想である。この構想を考える時、これまで津山市で取り組んできたことの成果と負の要因を洗い出し、現在

の所在を確認してから一步を踏み出している。そして、構想に掲げた基本方針を市を含めたコンソーシアムという民間中心の組織により実施計画を立て、施策を展開している。このように行政主導の展開だけでなく、むしろ民間主導によるコンソーシアムで構築した施策や事業をプロジェクト形式で展開していることは柏崎市でも学ぶところだと考える。ただ、観光のマーケッターやデザイナーが今は地域おこし協力隊の方から担ってもらっている現状とのことであるので、このような立場、観光全体のビジョンを持ち方向づけられる方の育成により、より持続可能になっていくと思われる。

市民が自分主体で取り組んでいる意識を持つことにより郷土への愛着や誇りの醸成につなげていくためにも、市民への構想の浸透、周知を十分図ることが必須と考える。柏崎においても特に観光に関して集客をさらに集めていこうとするのであれば、花火や海水浴という季節限定のイベントメニューだけでなく、いつ訪れても新たな発見につながるようなコンテンツの開発を民間主導で行えるように働きかけたい。ちなみに、津山市の観光客数は年間およそ190万人とのことである。

出張報告

報告日

2025年2月7日

会 派 名	柏盛クラブ
報告者氏名	三宮 直人 重野正毅
種 別	☐ 調査研究（ ☒ 行政視察） ☐ 研修会 ☐ 要請・陳情 ☐ 各種会議
用 務	姫路市視察
日 時	令和7年1月30日（木）10時00分～11時30分
場 所 （会場）	姫路市役所
調査項目等	「ウォーカブルなまちづくりの推進」の調査
概 要	<姫路市概要：令和6年1月1日現在> ・人口520,000人、面積543.5km² ・姫路藩の城下町で世界遺産「国宝姫路城」をはじめ歴史的遺産が多くあり。 ・主たる産業は観光産業と製造業。製造品出荷額等は2兆5000億円程度。令和5年の入り込み客数は940は万人。 ・議員数45名、議会事務局 現員23名 1. 「ウォーカブルなまちづくり」の概要説明 ①経緯 ・平成20年ころから姫路駅周辺の再開発の検討開始し構想をまとめたが市民からの評判が悪く一から練り直し。商店街連合会、市議会、会議所、まちづくり協議会から様々な意見を集約。市民団体、交通事業者、利害関係者、行政で整備推進協議会を設立し「ハード面での人中心のまちづくり」を検討し平成27年に再整備完了。人中心の街として歩行者空間・環境空間を整備前26%から67%に増やした。 ・ハード面の整備完了をもってソフト面の整備を開始、「ウォーカブルなまちづくり」の検討に着手。令和4年度に創設された第1回「まちづくりアワード」（構想・計画部門）において「姫路市ウォーカブル推進計画」が国土交通大臣賞を受賞。 ②姫路市ウォーカブル推進計画 ・目的は「居心地が良く歩きたくなる」まちなかの形成。街に選択多様性をつ

くり住み続けたい街、訪れたい街になり「選ばれる街」になること。期待効果は健康寿命の延伸と医療費削減、エリア価値の向上と税収増加、市民の外出意欲の向上。

- ・課題としては回遊性の向上（姫路駅前と裏の移動を容易に）、安心して歩ける環境づくり、移動は南北（姫路駅⇔姫路城）中心で線から面的な回遊性の確保。

- ・取組みの考え方は「公共空間（道・歩道・駅周辺広場・空地空き家など）の利活用」のための仕組みづくりが中心。

- ・利活用の仕組みとして、庁内に道路管理者/交通管理者としてのワンストップ窓口の設置（都市計画課が担当）。市民からのイベント企画（ソフト事業）の窓口は産業振興課が担当。

- ・計画の推進方法としては、市内に10エリアの重点区域を設定し短期（1～2年）では3か所の検証区域を設定し社会実験により効果の検証。その検証結果をもって中期（3～5年）では重点区域を設定しブラッシュアップ、長期（6～10年）では広域で推進区域を設定するなど段階的に進める。

- ・社会実験の検証項目は、道路規制による安全性と周辺道路への影響、来客者数や滞在行動と滞在時間、イベント運営者の準備期間や運営者の負担、参加者（来客者、運営者）の満足感など。

- ・イベント使用許可数は推進前の平成25年が43件、平成27年の推進開始後は毎年400件前後。年中毎日イベントが行われている状況。イベント費用は社会実験として市が企画するもの以外は運営者が負担。

- ・「ウォーカブルなまちづくり」の取組みから派生し、空き家や空地を活用した「リノベーションまちづくり」も展開。

2. 質疑

Q1 この計画以前に得た経験や知見を構想にどう活かしているか。

→車中心の街をハード整備を通して人中心の街に変えてきたことをウォーカブルの取組みでも踏襲してきた。

Q2 「理想のシーン」を文字ではなく「絵」だけで表現している狙いは

→言葉で言っても伝わらないため絵で表現した。絵を通して人中心の街づくりを市民一人一人から考えてもらいたかった。

Q3 他分野に渡って政策効果を発揮する「計画」とある。連携によりどのような政策効果が生まれたのか。

→健康ポイントの付与を考えている部署もある。具体的には検討中。目的の説明で話したが、大学にも相談したが検証が難しい。

Q4 ハードではなくソフト中心と思われますが、新たなハードの再整備はされたのか。

→再開発でのハード整備以外は市としてやっていない。

Q5 計画の検討にあたり外部の専門性をもった方に参加いただいたのか。

→前市長が医師、現市長が都市工学や街づくりの専門家。大学等への相談や助言はいただいている。

Q6 3つの重点区域と10か所の推進区域とあるがどのような基準で選定するのか。市民の理解、協力を得るためにどのような取組みをしているのか。

→選定したが、当初、商店街、活動団体にイベント等の賛同参加を求めたが手を挙げてもらえなかった。関連部署の職員や他の職員のつながりでお声がけし徐々に運営の参加者が増えていった。地道に取り組んだ。

Q7 計画に対する市民の反応は、市民は楽しんでるか。市民の満足度は。

→計画についてはパブコメなどで市民の声は聴いていない。市民からは知らなかったとの声があった。中心市街地での取り組みであり農村部は知らないと思う。構想としては理解できるのでできることは協力したいとの声もあった。SNSなどで情報を取り興味のある人は参加いただいている。市民の満足度や歩行者数なども把握している。携帯の位置情報を使った人流分析も着手している。

Q8 なぜウォーカブルなのか、なぜ選択したのか

→ウォーカブルは社会資本整備事業の一貫であり、国交省が強力に推進していて補助金がもらいやすい。障がい者への配慮は特に行っていない。



所 感 等

【三宮直人】

ウォーカブル、直訳すると「歩きやすい、歩きたくなる、歩くと楽しい」であり、健康志向やSDGs意識の高まりから最近のまちづくりにおいては重要なキーワードになっている。私自身も信越線や上越線沿線の市町村を訪ね、街歩きを通して柏崎のまちづくりにはウォーカブルな発想が必要と考えていたこと、姫路市においては「姫路市ウォーカブル推進計画」が国土交通大臣賞を受賞したことから視察先に選定した。

視察前、柏崎市が令和3年立地適正化計画の誘導政策の一つに「歩いて楽しい街づくり（ハード整備に頼らない柏崎版ウォーカブルなまちづくり）」を掲げ、いくつかのウォーキングイベントを行ってきたことから姫路市内の名所旧跡や市街地を歩く取り組みかと思っていた。また柏崎が言うハード整備に頼らない、つまりお金のかからない取り組みかと考えていたが全く違った。

まずハード事業として駅および駅周辺から姫路城に至る空間を再開発し、姫路駅の駅前と駅裏をつなぐ道路をバスとタクシーの占有道路（トランジットモール、自家用車通行禁止）とし、自家用車の走る駅前大通りを3車線から2車線化し歩道を拡張、駅前には外堀を利用した公園を配すなど、まずはハード整備で人中心の公共空間を確保した上で、ソフト事業として広がった公共空間を市民主体に活用してもらう取り組みであった。つまりハード事業の土台の上にソフト事業としてのウォーカブルがあるというものだった。

姫路市役所で説明を聞いた後、姫路駅から姫路城まで歩いて視察した。生憎、木曜日の平日でイベント等は開催されていなかったが、駅から正面には姫路城が見え、駅前公園の設えや広く整備された広く歩きやすい歩道、通り沿いには興味を引く地元の商店がちらなり「歩きたくなる空間」となっていた。一步路地に入ると旧態依然とした古い商店街だったが、こうした通りにある空地や商店の利活用（リノベーション）にも取り組んでいた。

柏崎市と姫路市では歴史的な違いや規模の違い（姫路市の人口は柏崎市の約7倍）があり同じことは望むべくもない。しかし、柏崎駅と駅前通りは柏崎市の玄関口であり顔とも言えるが歩いて楽しいだろうか、どうしたら歩いて楽しい空間となるか想像していきたい。

【重野正毅】

新幹線の姫路駅を降りると目の前に姫路城が展望できる。姫路駅の再開発の大きなテーマがこの姫路城との一体化にあったように思う。この国宝であり世界遺産である姫路城を中心にウォーカブルなまちづくりを進めようとする事は至極当然なことのようを感じる。駅周辺はトランジットモールになっており、自家用車の立ち入りはできないなど、市民生活の中心に駅があるというより、観光客の入場口といった捉えになっているようだ。姫路市の観光客数は年間940万人を数えるとのことである。私たちが視察で訪れた時は平日ということもあり、ほとんどが外国人観光客のように感じられた。

姫路市は令和3年3月にウォーカブル推進計画を策定している。この推進に当たってはハード面におけるまちづくりを都市計画課が、ソフト面を産業振興課が担当しているとのことであった。この計画の区域も姫路駅から姫路城までの地域に限られているように受け止められた。ウォーカブルの概念は理解できるところだが、ハード面の整備なくしてうまく進められるはずもなく、市の担当者が描く通りの地域のイベントづくりなどとしてスムーズに住民が動いてくれるわけでもない。これらの整備、特に住民主体の活動、市民主体のイベント開催などは相当難しかったように感じた。この計画が動き出してまだ4年と経

	っていない。そのため十分な検証もされていないのかもしれないが、今後の検証結果を待ちたい。また、計画に含まれていない市域の住民の意識はどんなものがあるのか、市民全体のまちづくりになっているのか、という視点も検証することで、柏崎市のような広い市域での取り組みに生かせるといいと思う。
--	--

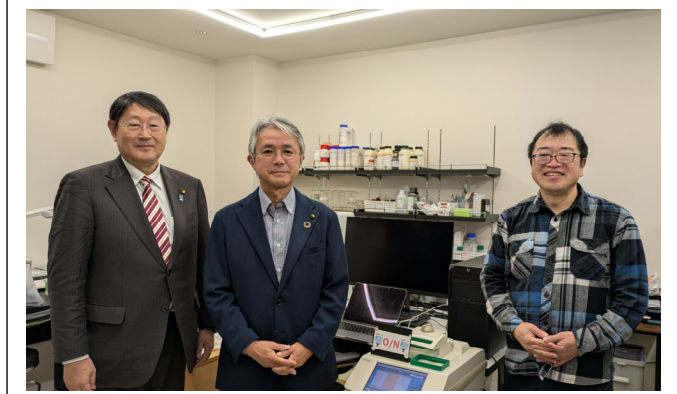
出張報告

報告日 2025年 2月7日

会 派 名	柏盛クラブ
報告者氏名	三宮直人・重野正毅
種 別	■調査研究（□行政視察） □研修会 □要請・陳情 □各種会議
用 務	株式会社 Cyberomix の視察
日 時	令和7年1月31日（金） 9：00 ～ 11：00
場 所 （会場）	株式会社 Cyberomix（サイバーオミックス） 京都市上京区毘沙門町487
調査項目等	新しい働き方について
概 要	<株式会社 Cyberomix（サイバーオミックス）の概要等> 資本金（資本準備金を含む）： 600 万円 創業： 2023 年 1 月 従業員数（パートを含む）： 44 名（平均年齢 30 才台） 事業内容： 医薬品の開発および学術受託サービスの提供 代表取締役： 渡辺亮 今回、京都市上京区に事業所を置く創薬スタートアップである株式会社 CyberomiX（以下 CX）の視察を行った。 代表取締役社長の渡辺亮氏は、新潟県見附市出身で、長岡高校、東京理科大学、東京大学大学院を卒業した研究者である。京都大学 iPS 細胞研究所（CiRA）および京都大学大学院医学研究科で教員を務めた後、2023 年 1 月に同社を創業した。CiRA では、山中伸弥博士（2012 年ノーベル生理学医学賞）とともに、2014 年、世界初となるヒト iPS 細胞の臨床応用を主導し、成功に導いた。 渡辺氏は、「シングルセルゲノミクス」の国内のオピニオンリーダーとして、大学や製薬企業の研究者に大きな影響を与えている。ヒトの体は数十兆個の細胞から構成されており、一つ一つの細胞は別々の性質をもつ。「シングルセルゲノミクス」とは、一つの細胞（シングルセル）の設計図である DNA を研究する学問である。CX は、このシングルセルゲノミクスによって、がんをはじめとする様々な病気の原因を細胞一つ一つのレベルで研究し、新しい診断や治療の方法を開発している。 CX は、研究開発のために積極的な設備投資を行っており、コロナ禍で脚光を浴びた PCR、遺伝子の配列を決定する次世代シーケンサー、そして一つの

細胞の遺伝子解析をする装置など、総額1億円を超えている機器が備わっている。これらの機器は専門性が高いために、大学を卒業した従業員が取り扱っている。

また CX は、社是の一つ「働きながら学ぶ、学びながら働く」を実践するべく、ユニークな雇用創出を進めている。近年、スタートアップブームが盛り上がっているとはいえ、大半の若者はより安定な大企業指向であることは変わらない。そこで、CX では。家事や育児のために勤務できる時間に制限がある子育て世代を積極的に採用しており、そのうち数名は修士号や博士号を取得した従業員である。また、京都大学を始め、国内外から20名以上の学生インターンを採用し、その柔軟な発想を研究開発に活かしている。学術研究では海外との協力や競争があるため、外国人も3名採用しており、その従業員とは英語でコミュニケーションを行うなど、多様な働き方を進めている。CXの研究開発の一部は、リモートでできるため、このような形態を取ることができる。そのため、柏崎市にキャンパスを置く大学との連携も可能である。



<質疑>

Q1 大学を出て、新しく起業しようと考えた動機は？

→診断や創薬といった規模の大きい事業を行おうと考えていたときに、公的機関としての大学でできることの限界（予算、勤務体系などの制度、スピード感）を感じ、一気に目標に向かえる今の形（資金を一気に集めて様々な勤務形態がとれる、等）を考えました。

Q2 なぜ「家事や育児のために勤務できる時間に制限がある子育て世代」をターゲットにしようとしたのか？

→専門職は「フルタイムでしかできない」という体裁を取っているところが多く、そのスタイルでは勤務が難しいと感じている人が多いと感じたためです。また、子育て世代ならではの考え方が、職場の多様性を生み出せると考えたところもあります。

Q3 いくら専門性のある方々とはいえ、それをいかにビジネスに結び付けていけるのが難しいと考えるのですが、今のところうまく続けられている秘訣は？

→大学にいるときから起業を意識していたため、大学で勤務する研究者を見な

	がら「研究者を巻き込むビジネスモデル」をイメージしていたからではないか と思います。 Q4 柏崎を含めた地方で、地方で生活している若者、主婦層の方々を活躍させ ようとするためには、どんな環境が必要と考えるか？ →「長く働く方がありがたい」という先入観を捨てて、「一日4時間の勤務を希 望していて、時々子どもの看護などで休むことがある」という前提でどのよう な仕事をしてもらえるか、を前提に勤務内容を考えると意外なアイデアが浮 かぶかもしれない、と感じています。また、「最初の数ヶ月は即戦力にならなく ていい」という長期を見据えた視線も大切かもしれません。とはいえ、原資が 必要なので、付加価値の高い商材を基盤にする必要は強く感じています。少な くとも我が社は「自分の働きが会社の利益につながる。そして、自分の給与を どんどん上げる」という前提で仕事をしていただいています。 Q5 新潟工科大学などとの連携も考えられるとも話していましたが、具体的な 構想を持っているのなら教えてほしい？ →何がうまくいくかわからないので、遠隔でできるインターンシップから始め るのがよいのかな、と思っています。我々だけでなく、全国にいる柏崎市出身 の方々にも協力をいただける形もありかなあ、と愚考しております。 Q6 行政の補助金を頼りにする起業では早々に限界を迎えることがままあり ます。民間の事業所がまちづくりという大きな視点を持って事業に取り組むた めに必要なことはどんなことと考えるか？ →補助金頼りは長続きしないことについて、完全に同意します。我々も補助金 をもらえるチャンスがあるのですが、基本的には出していないです。営利企業 は、国や自治体の制度に依存するのではなく、自立できる戦略を持ちつつ、い ざまずいぞ？という時に助けてもらうくらいの感覚でいるべきだと感じてい ます。
所 感 等	【三宮直人】 CyberomiX（以下、CX）のような医療・医学の最先端の環境に触れること ができ、この出会いを大事にしていきたい。CX 社の取組みを技術的・化学的に 理解することは難しいにしても渡辺社長のような方と繋がりができたことを 今後の糧としたい。 CX 社の「家事や育児のために勤務できる時間に制限がある子育て世代を積 極的に採用する」は、労働力人口が減少する環境、働き方改革が進む時代にお いて必要である。以前、議会において「埋もれた労働力」として女性の活躍を 発言したことがあったが、正に実践いただいている。同様な取組みが以前視察 した糸魚川市の「糸魚川テレワークオフィス」で行われている。こうした取組 を普及していく必要があると思う。

渡辺社長との懇談の中で私が付き合いのある山形県鶴岡市のヒューマン・メタボローム・テクノロジー社を話題にしたところご存じでありご縁を感じた。

CX 社は将来の日本のマーケットを切り開く企業であり、今後も情報交換させていただきたい。早速、1月31日の新潟日報で記事となった「ジェットエイト社」が柏崎市に進出することを紹介した。新潟工科大学を初め柏崎市との関係性向上を模索していきたい。

【重野正毅】

新薬の開発や細胞を遺伝子レベルで解析していくことなどに専門的に取り組んでいる会社ではあるが、その従業員の採用においては、私がイメージしていた人材確保ではない形であった。専門的な業務にどれだけ関わってきているかといった基準だけではなく、子育てや家庭の事情でフルタイムで働けなかったりリモートにより研究の解析ができたりする環境を整備することで、もしかしたら社会の中で埋もれてしまっていた有資格者や専門的技術者の確保をかなえている。また、若者特に学生のインターンシップ者の活用にも力を入れており、いわゆる玉石混淆の学生の中から将来の日本を背負えるような人材を育成するためには何が必要なのかを個別に試しながら方向づけている手腕には恐れ入った。柏崎市との連携も考えられるという話をしてくださり、どんなことにその力を活用できるかを協議していきたい。